

二〇二四年度

恵泉女学園中学校 第一回 入学試験問題

国語（四五分）（全二ページ）

注意

- 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。
- 二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、ソラは中学二年生の男の子です。中学一年生の時、顔のホクロを理由にいじめられてから、保健室登校が続いています。二年生になると俳句好きのハセオが時々保健室に来るようになりました。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

夏も深まり、青空をゆく雲の輪郭がはっきりしてきた、ある日。

ソラはひとりで、保健室にいた。クローバーの机に座って、小説を読んでいた。

正確には、もうひとり、この部屋にはいた。ハセオが、カーテンを引いたベッドの上で、寝息も立てずに眠っていた。前夜に、三部作のSF映画を一気に観て夜更かししたとかで、保健室に寝に来ていたのだ。

北村先生も不在で、あたりは静かだった。遠くからはプールに興じる生徒たちの声が聞こえる。少し寂しさのまじった空気感が、ソラは決して嫌ではなかった。

と、ドアのすりガラスに人影が映り、ノックする音がした。

「高橋です」

ソラは、⁽¹⁾その声に、反射的に身をすくめた。

「川井ソラ、いますか？」そう言いながら、入ってきたのは、元担任の高橋先生だった。

すらりと背の高い、眼鏡のよく似合う理科教師。流行のゲームにも詳しくて、生徒たちに人気のある先生だった。

でも、ソラはなじめなかった。保健室登校がはじまった去年には、家庭訪問や、三者面談が繰り返されたが、高橋先生は、ソラと臣野シゲルとを、仲直りさせることを第一に考えていた。とにかく臣野シゲルを遠ざけてほしかったソラとは、決定的に考えが違ったのだ。

二年になって、担任が替わってからは、会ったことはなかった。いまは、別のクラスを持っているわけで、わざわざ元受け持ちのソラのところに来なくてもいいのに。

ソラは、見下ろしてくる高橋先生の視線を避けて、保健室の棚に置かれた、リング形のガラス製の時計を見つめていた。

「おまえ、ひとりなの？」

ためらいながら、ソラはうなづく。

(2) 「イエスカノー」で答える問い方をするのは、相変わらずだった。こういう問い方をすると、相手も答えやすいと、高橋先生は思っている。たぶん、話ベタな生徒に対しての、教師としてのテクニクなのだろう。でも、そのぶん、「イエスカノー」で話していくことが、こぼれおちてしまう。

「北村先生はお留守かな……」高橋先生はぐると部屋を見回す。ハセオは、起きているときとはうらはらに、眠っているときにはびっくりするくらい静かなので、気づいていないようだ。

「川井、やっぱり、教室には行けてないのか？」

うなずく。

「もう、臣野とは違うクラスなんだよな。それでも、だめか？」

うなずく。

「保健室にいたほうが、楽か？」

うなずく。

「うーん。それじゃあ、しょうがないな」

高橋先生は、大きく息を吐いた。細かいところを聞かないで、イエスカノーか聞くだけでは、相談にはならないと思うが、たぶん、そういうところに費やす時間や労力が、高橋先生には、むだやもたつきに思えるのだろう。

「もうすぐ夏休みだろ。俺の知り合いがやってるヨットスクールに、川井、来てみないか？ 一週間、海べで暮らすと、気分もずいぶん変わると思うんだ。どうだ？」

ソラは、うつむいたまま、かぶりをふった。

「だめかあ……うんうん……」

高橋先生は、自分で自分を納得させるかのように、機械的なうなずきを繰り返す。

ソラのことを気にかけてくれているのはありがたいけれど、正直なところ、放っておいてほしかった。

「だめなんだよな、やっぱり」

高橋先生は、説得ということをしな人だった。ソラが否定の意志を示した以上、それでこの話は終わってしまうのだ。もう出ていこうとしている、というのがソラには気配でわかった。

「ん、これは、^(注)歳時記か？」

高橋先生が、クローバーの机から取り上げたのは、さっきハセオが置いた歳時記だった。

「ふーん、川井は、俳句に関心があるのかあ」

ばらばらとページをめくる音が、ソラの頭の上で聞こえた。視線は、リング形の時計に向けたままだ。タコ糸で、縛りつけてしまったみたいに。

「俺もな、理系なんだけど、新聞の投稿欄とうこうらんを読んで、俳句っておもしろいなと思っててな。数字ばかり相手にしているから、言葉を知らないんだよ。でもな、ほら……」

高橋先生はページを繰る指をぴたつと止めて、

「白雨はくうなんて、きれいな言葉だよなあ。夕立のことを、そういうんだな。最近じゃ、ゲリラ豪雨ごううなんていうが、それじゃ味気ないもんな。こういう、趣おもむきのある言葉、大事にしていきたいよな」

(注) 歳時記…俳句に使われる季語を四季や月によって分けて説明した本。

高橋先生は、しばらく歳時記をめくっていたが、ソラがうつむいたままで、反応がないのがおもしろくなかったらしい。

「じゃあ、ヨットスクール、行きたくなったら連絡してくれよ。いつでも、待ってるから」

高橋先生が出ていったドアの音が、しずかな部屋の中に、響く。

そのとたん、プールからのしやぎ声に戻ってきた。いままで、たまたまやんでいたのか。それとも、聞こえなかったのか。

その遠い声の裏側から、ふいに近いところで声がした。

「ソラ、ソラ」

カーテンの内からの声。

ソラは、お化けにささやかれたかのように、びくつと肩を震わせた。

「ハセオ」

ハセオは、はずみをつけて、ベッドから飛び降りる。日ざしのさしこむ窓に向かって、大きく伸びをする。長身の彼がその姿勢を取ると、まるで太陽を射ようとする弓のように見えた。

「え、いつから起きてたの？」

おそるおそるソラが尋ねると、

「ノックで起きた」

こともなげにハセオは答える。それから、ずいっとソラのほうに顔を向けて、

「あいつの言うこと、おかしいよな」

と言うので、ソラは、身構える。こちらの事情をろくに知らないハセオが、適当に慰めなぐさの言葉をかけるのか、と思ったのだ。

「オモムキノアルコトバラダイジニシタイって、ああいうこと言う大人ってよくいるんだけど」

机の歳時記を手にとって、高橋先生と同じように、ぱらぱらとめくりながら、

「おれはな、こう思うのよ。白雨って、たしかにきれいな言葉だけどさ、それ自体がきれいなわけじゃない。むかしから、それを

さ、きれいな歌や、詩や、句に詠よんできたから、きれいに聞こえるようになったわけだろ？」

ハセオは、こんなふうには、言葉や、俳句について話すときだけは、真剣しんけんそのものだ。そういうときには、ひとさし指で、あごをせ

わしなく擦こする。本気で考え、しゃべっているときの、クセだ。

するとふいに、ハセオのくちびるがゆっくりとひらいて、びっくりするほど澄すんだ、歌のような調べが、そこから流れてきた。

A から A へこどもの走る白雨かな

ソラは、きれいな鳥が一瞬いっしゆん目の前を過ぎていったような感覚に、しばし、浸ひたっていた。

俳句を朗唱しているのだ、と気づくのに、数秒、かかったほどだった。

ハセオは、ひと呼吸おいてソラのほうを見て、にやつと笑う。そして、いつもの口調でとうとうとしゃべりだした。

「こういう句な、いいと思わん？　ひと目見たときから、頭の中にビシッと刻まれた句なんだけどさ。外で遊んでたらさ、夕立が降ってきて、いそいでうちに帰る途中とちゆうで、できるだけ濡ぬれないように、木の下を通っていくじゃん。その感じな。葉っぱのすきまから、雨と日差しがいっしょに降ってくるキラキラ感って、おれ大好きなんだけど、おれのかわりに、おれの何倍もうまくそれを言うてくれてる。だからさ、すごいのは、白雨って言葉じゃなくて、白雨って言葉を、きれいに使ってきた人たちだと思っただよ。白雨って言葉を使って、安っぽいことやつまらないことを言ったら、やっぱり白雨って言葉が輝かがやかないじゃん？　そんで、輝かせてきた人に、悪いじゃん？　というより、悔くやしいじゃんか、昔の人にできて、おれらにできないなんてさ。だから、おれ、俳句を作ってるんだ」

ハセオは、歳時記を、ほんと、机の上に投げだす。

その瞬間――

「あ、こんなのどう？」

ポケットをごそごそして、取り出したのは、紙くず――いや、短冊たんざくだった。ハセオはその短冊を机の上にひろげると、まるで金魚すくいをするかのようなすばやさで、ボールペンでささっと言葉を書き留めた。

白雨駆け抜けるケーキが待っている

「どうよ？」と言って突き出された短冊の言葉を読んで、⁽⁵⁾ ソラのくちびるに、ふっと笑みが浮かんだ。自分でも、気づかないうちに。ああ、こんなことってあるなあ——そう思ったのだ。夕立に降られて、濡れて帰ってくる。そうすると、家であたたかい紅茶を出してくれる。紅茶には、ケーキもついてくる。そんなことが、いつだったか、あったような気がする。

夕立に濡れた肩の気持ち悪さ、革靴の匂い、湿った靴下で廊下をぺたぺた歩く感覚、口にふくんだ紅茶の苦さ、クリームの舌触り……一気によみがえってくる。ソラには、このケーキは白いクリームを使ったショートケーキに違いないという確信があった。たぶん、雨しぶきの白さを表しているであろう「白雨」の「白」、この字が、白いケーキだということを想像させる。だから、「夕立」ではなくて「白雨」である必然性があるのだ。

でも、ソラにはそれを全部言葉にすることは、できなかった。というより、ためらわれた。ハセオの句の世界が、むしろ壊れてしまふような気がしたのだ。それで、

「わかるよ」

とだけ、答える。

ハセオは、うれしそうに、歯を見せて笑った。「んじゃ、これ、とっておこ」と言って、短冊を胸ポケットにしまう。

「ようするにさ、言葉は使い方次第だ^{しだい}ってことだよな。逆も言えると思うんだよ、バカとかアホとかだつてさ、きつたない言葉だけどさ、おれがたとえば、ソラにさ、謎句^{なぞく}がとけなかったときは『バツカでー』とか言うじゃん。ああいうときの『バカ』は、本当にバカにしているバカじゃないって思うんだよな。あ、なんかバカつて言いすぎてよくわからなくなってきたけど」

ソラは、どきつとする。

いやなあだ名をつけられてしまった。汚^{きたな}い言葉。

(6) ハセオの考えに沿うのなら、そんな言葉でも、輝くことがある、ということだ。

いや、ハセオは、自分の俳句で、輝かせてみせる、と言っているのだ。

本当だろうか？ そんなことができるのだろうか。

臣野シゲルたちが口にするときの、その言葉は、悪意にまみれている。たぶん、彼らは、人を傷つける刃物^{はもの}としてしか、その言葉を使えない。では、ソラ自身なら？ 到底^{とうてい}無理だ、と思う。でも、ハセオなら、できそうな気がした。

「だからさ、あいつは、まちがってるよ」

そう言って、ハセオは笑う。

結局その日、ハセオは、ソラに何があったのかとか、高橋先生とどういう関係なのかについては、ひとことも聞くことはなかつ

た。本当に関心がなかったのか、気を遣^{つか}ってくれたのかは、わからない。でも、そのことが、ソラにはむしろありがたかった。その日から、ソラは、マスクをしないで保健室に入るようになった。

(高柳克弘『そらのことばが降ってくる 保健室の俳句会』より)

問一 ⁽¹⁾ その声に、反射的に身をすくめた とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中

から選び、記号で答えなさい。

ア 保健室で安心して気を緩めていたところに、急に誰か人の声がして驚いたから。

イ ソラが苦手としている高橋先生の声が思いがけず聞こえて、おそれを感じたから。

ウ 高橋先生から授業に出席しないことを叱られると思い、隠れたくなったから。

エ 今度こそ高橋先生は臣野シゲルとソラを仲直りさせるつもりだと思い、警戒したから。

問二 ⁽²⁾ 「イエスカノー」で答える問い方 とありますが、高橋先生がそういう話し方をする理由をソラはどのように考えています

か。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 話すのが苦手な生徒からでも簡単に答えを引き出せて、効率的だと思っているから。

イ 反応が遅い生徒の話の聞いても、問題の解決につながらないと考えているから。

ウ 保健室登校の生徒にうまく対応するテクニックがあることを、ひけらかしたいから。

エ ソラとは考えが合わないとわかっていて、細かい話をするつもりが全くないから。

問三 ⁽³⁾ こともなげに とはどのような様子ですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えな

さい。

ア 遠慮えんりょのない様子。

イ なげやりな様子。

ウ 平然としている様子。

エ 堂々としている様子。

問四 ⁽⁴⁾ オモムキノアルコトバラダイジニシタイ とカタカナにすることでハセオのどのような気持ち表現していますか。その説明

として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの考えを認めようとしないう大人に反抗はんこうする気持ち。

イ ソラを追いつめるような先生の口調を批判する気持ち。

ウ もつともらしいが中身なごころが伴ともなわない言い方を軽べつする気持ち。

エ 耳慣れない大人びた言葉づかいに対してとまどう気持ち。

問五 A に共通してあてはまる語を書きなさい。

問六 (5) ソラのくちびるに、ふっと笑みが浮かんだ。自分でも、気づかないうちに とありますが、このときのソラの気持ちを説明しなさい。

問七 (6) ハセオの考えに沿うのなら、そんな言葉でも、輝くことがある、ということだ とはどういうことですか。分かりやすく説明しなさい。

問八 本文の表現について説明した次のア～オの文のうち、正しいものには「A」を、間違っているものには「B」を書きなさい。

ア 「まるで太陽を射ようとする弓」という比喩ひゆにより、ハセオをけんかっ早い少年として印象づけている。

イ 「プールからはしやぎ声が戻ってきた」という表現によって、ソラの緊張きんちやうからの解放を効果的に表している。

ウ \sphericalangle 保健室登校 \sphericalangle 、 \sphericalangle 仲直り \sphericalangle は、 \sphericalangle をつけることで、それらの言葉に対するソラの違和感いわかんを表している。

エ 「白雨駆け抜けるケーキが待っている」は俳句の基本的なリズムを忠実に守ることで、子供らしさを表している。

オ 「マスクをしないで保健室に入るようになった」と書くことで、ソラの気持ちの変化をほのめかしている。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

イギリスの博物学者ヘンリー・ウォルター・ベイツは1861年に、彼自身のアマゾンでのチョウの調査に基づく成果を発表しました。アマゾンには多くの「毒があるまじいチョウ」がいます。彼らは進化の系統としても近く、細長い羽に黒地に赤・白・黄色のまだらや帯を持っています。これらは警告色として理解できます。

ところが採集したチョウを整理するなかで、⁽¹⁾ベイツは大きな発見をします。ひとまとめにできると考えた「毒チョウ」の中に、まったくちがう系統のチョウが混じっていたのです。しかもそれらは毒のないチョウでした。ベイツは、この現象を以下のように考えました。

「毒があるまじいチョウ」を食べた鳥などはその経験から学習して、同じような姿のチョウたちを避けるようになる(警告色)。すると、毒を持たなくとも、似たような姿をしている他の種のチョウも食われなくなるだろう。こうして、毒を持たないまったくちがう系統のチョウたちの中からも、毒チョウに似たものが生き残り、いまあるような種ができてきたのだ。

このように、もともとおいしくて捕食者に狙われてしまう種が、まずくて避けられる種の警告色などをまねるように進化して、捕食者の攻撃から逃れることは、発見者にちなんで「ベイツ型擬態」と呼ばれるようになりました。

「羹(あつもの)に懲りて膾(なます)を吹く」ということわざがあります。熱いお吸い物(あつもの)でやけどをした人が、それ

をこわがるあまり、冷たい酢すの物（なます）でもふーふー吹いて冷まそうとする、ということ、

A

と

という意味です。毒のないベイツ型擬態のチョウを避ける鳥は、彼ら自身にとっては「これも『あつもの（毒チョウ）』かもしれない」という用心ですが、「なます（無毒のチョウ）」にとつては、みごとにだましたということになります。

ベイツ型擬態は、ベイツの発表のわずか2年前の1859年に『種の起源』という本を出版して本格的な進化論をつくりあげようとしていたダーウィンから高い評価を得ました。ベイツの考えたようなかたちで、捕食者をふくむ環境かんきょうにうまく適応した個体が生き残り（適者生存）、1つの動物種が誕生するというのは、ダーウィンが考える進化のシナリオそのままだったからです。

しかし、ここですぐに、1つのさらなる謎なぞが見つかります。それは、東南アジアのマレー諸島の動物たちを研究したことで知られるアルフレッド・ラッセル・ウォレスによって発表されました。ウォレスはベイツの友人で、そもそもベイツをブラジルでの調査に誘さそったのもウォレスです。しかし、ウォレスは先にイギリスに帰り、あらためてマレー諸島での調査研究で活躍かつやくすることになったのです。ウォレスは東南アジアでもベイツ型擬態のチョウがたくさん見られることを報告しましたが、同時にそうやって擬態しているのはメスだけだという発見もしたのです。オスとメスの両方がベイツ型擬態をするチョウもいますが、さまざまな種のチョウでメスへのかたよりがわかってきます。さらには、メスのすべてが擬態しているわけでもないということもわかってきます。ベイツ型擬態は捕食者の目をあざむく方法として理解されるので、オスでもメスでも効果があるはずですが、ならばどうして、メスだけが擬態する

種があるのでしょか。さらに、個体どうしの生き残り競争という点でも、ベイツ型擬態は有利だからこそ進化したはずです。ならば、擬態しないメスがいるのも理解できません。深まる謎のなかでたくさんの方が長い年月、研究と議論を重ね、やがて、さらなる進化のしくみが見えてくることになります。

(中略)

ここで、時々、バラエティー番組などに出てくる「⁽²⁾ロシアン寿司」などと呼ばれるものを思い浮かべてみましょう。「ロシアン寿司」は、見た目にはおいしそうな寿司のいくつかの中に、ワサビがたっぷり入っていて、食べたらひどい目にあうものが1つだけ隠されているというしかけです。ここでもし、全部がワサビ入りの寿司で、それをワサビが大嫌いな人が食べるとしたら、1つでも食べれば、もう二度とワサビ入りかもしれない寿司は食べたくないということになるでしょう。10個のうち8個にワサビが入っていても、大概は「はずれ」を引いてしまうことになります。しかし、ワサビ入りとワサビ抜きが5個ずつなら、アウトの可能性も半々になります。1〜2回では「だいじょうぶだ、この寿司はからくない」ということになるかもしれませんが。そして、10個のうち1個だけがワサビ入りなら、当たった人は運が悪いということになるでしょう（この運を競うのが、もともとの「ロシアン寿司」ですね）。

このように、鳥たちの前にあらわれるよく似たチョウたちの中に、「ワサビ入り（まずいチョウ）」が多ければ多いほど、まずいふりをして「ワサビ抜き（おいしいチョウ）」は有利であることになります。この状態ならば、進化のしくみはベイツ型擬態をす

る個体を増やす方に向かいます。

しかし、あまり擬態個体が増えすぎると今度は「わたしはまずいですよ」という擬態のメッセージが意味を持たなくなっていきました。そうなれば、擬態しても有利とはいえません。こうして、うまくバランスが取れるところに落ち着くのだらうという考え方が、「すべてのメスが擬態するわけではない」という謎の B な解釈かいしゃくとして提出され、進化論はまたワンステップ、発展することになったのです。

シロオビアゲハのメスの中でも一部の個体だけが擬態するのは、その環境でのシロオビアゲハのメスの数・擬態のモデルになるべ(注)ニモンアゲハの数・彼らを狙う捕食者の数が、ベイツ型擬態が効果をあげるところでバランスを取っているからでした。ではあらためて、なぜメスだけが擬態するのかを考えてみましょう。

いろいろな動物種でオスとメスがちがう姿になるのは、異性にアピールするため、あるいはそういう異性をめぐって同性どうしで競りあうためです。たとえば、シカはオスだけが角を発達させますが、これはメスをひきつけ、また、オスどうしが角で押しあつて強さを競うといった生態と結びついています。

しかし、シロオビアゲハのメスの擬態が同性どうしの競争によるものではないのは、ここまでお話ししてきた通りです。また、シロオビアゲハについては、擬態しているメスはオスから同種として認められにくいことがわかっており、繁殖相手を効率よく獲得すかくとく

(注) ベニモンアゲハ：毒のあるチョウ。

る競争だけ考えれば、擬態することはむしろ不利だろうと考えられます。

実際、動物園などの捕食者のいない環境で飼育していると、世代を重ねるにつれて擬態個体は減っていきます。このことには個体自体の寿命じゅみょうも関係しているようです。どうやら、シロオビアゲハがベニモンアゲハのような模様になるとすると、原型の状態よりも何かのコストがよけいにかかるらしく、それによって寿命がちぢむと考えられるのです。そのコストが何なのかはこれからの研究課題とされています。

それでもメスだけが擬態になる方向性を持つのはなぜでしょう。そこから浮かび上がってきたのが、そもそもシロオビアゲハのメスの方がオスよりも捕食者に狙われやすいのではないかと考えたのです。

熱帯の森には、さまざまなチョウがすんでいます。それらが鳥におそわれる確率を細かく調べてみると、おそわれやすいのは比較ひかく的高い空間をすばやく飛びまわる大型の種であるということがわかりました。大型の種の方が胴体どうたいも太く、それに応じて飛ぶ力も強くなりますが、捕食者にとっては食べごたえがあることにもなります。こうして、大型種ではオスメスともに擬態するものが多くありません。そのなかでもメスの方が好んでおそわれることがわかっています。メスはおなかに卵をたくさん詰めこんでいますが、これも大型種の方が1頭当たりの卵の量が多いことになります。鳥としては大型の種でもメスを狙うのが、1回ごとの狩りかりでより多くの栄養エネルギーを得るのに有利なのです。こうして、大型種でも小型種でも常に狙われやすいメスは寿命をちぢめる危険があっても、擬態して生き残ろうとする方が自分の子孫を残せる可能性があがることになります。これがメスだけが擬態する種がいることの

説明として提出された考え方です。シロオビアゲハはアゲハチョウの中では比較的小型なので、メスだけが擬態する方向に行きやすかったと考えられそうです。

(森由民『ウソをつく生きものたち』より)

問一 ベイツは大きな発見をします⁽¹⁾ とありますが、ベイツはこの発見からどのような結論にたどりつきましたか。四〇字以内で説明しなさい。

問二 A にあてはまる最も適切な文を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 用心に用心を重ねてもこちらの思うようにはならない
- イ 用心して一か所にとどまればいつかは成功する
- ウ 再び失敗する前に十分に用心しなくてはならない
- エ 以前の失敗のせいで必要以上の用心をしてしまう

問三 (2) ロシアン寿司 とありますが、筆者が説明に「ロシアン寿司」を用いるねらいとして、最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 擬態が効果を発揮するためには、まずいチョウとおいしいチョウの比率が重要であると訴える^{うった}ため。
- イ 擬態を見抜けずにみすみすおいしいチョウを取り逃^にがしてしまふ捕食者を、こっけいに見せるため。
- ウ まずいチョウのふりをして、まんまと捕食者を出し抜くシロオビアゲハの勝負強さを理解させるため。
- エ 姿を変えてでも生き残りに賭け^かようとするシロオビアゲハの切迫感^{せっぱくかん}を、印象づけるため。

問四 B にあてはまる最も適切な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 画一的 イ 否定的 ウ 合理的 エ 主観的

問五 本文の内容に合っているものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア シロオビアゲハのメスは、大型の種ではないので狙われにくく、擬態していないものもある。
イ シロオビアゲハのオスは、強い種を残すために、寿命がちぢむような擬態をすることはない。
ウ シロオビアゲハのメスは、擬態することで強く見えるので、オスから繁殖相手に選ばれにくくなる。
エ シロオビアゲハのオスは、メスをひきつけるために強そうなチョウに擬態して、子孫を残そうとする。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 甘い食べ物をセッセイする。
- ② 苦労して学問をオサめる。
- ③ 二つの出来事はミッセツに関わっている。
- ④ 再発防止に向けてゼンシヨする。
- ⑤ 台風で試合がジュンエンされた。